

インクルーシブ保育における配慮・支援に関する心理職の意識とスタンスに関する調査研究

小柳 菜穂 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
 橋本 創一 東京学芸大特別支援教育・教育臨床サポートセンター
 田中 里実 東京都立大学大学院人文科学研究科
 三浦 巧也 東京農工大学大学院工学研究院
 細川 かおり 千葉大学教育学部

要 旨：インクルーシブ教育における支援は、適応支援と発達支援などの様々な側面から提供されることが求められるが、その両視点から整理、検討された研究は未だ見られない。本研究は、障害児のインクルーシブ保育・教育における配慮と支援について検討することを目的とし、心理職を対象に適応支援や発達支援といった支援側面や機能性などの意識や実践におけるスタンスについて調査を実施した。その結果、インクルーシブ保育・教育を展開する幼稚園/保育所では発達支援・適応支援の両面が重要であり、専門機関と協働しながら療育的な役割も担うことが望ましいと考える心理職が調査対象の約半数を占め、発達支援・適応支援のどちらかのみを優先する傾向は見られなかった。また、障害児支援における心理職は、様々な支援の側面や機能性などを理解したうえで、偏ることなく様々なスタンスで支援に携わっていることが明らかになった。

Key Words： インクルーシブ保育、心理職、適応支援、発達支援

● I. はじめに

インクルーシブ教育とは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が general education system(教育制度一般)から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が求められている。また、インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追及するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に答える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要であり、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校

といった、連続性のある「多様な学び場」を用意しておくことが必要であるとされている(文部科学省, 2012)¹⁾。つまり、この多様な学び場において、合理的配慮を含む適応支援と、発達上の課題を達成することを目指す発達支援を提供することが求められるといえるだろう。

小学校に先立つインクルーシブな場として、幼児教育・保育の現場が挙げられるだろう。幼児教育・保育現場におけるインクルーシブ教育(以下、インクルーシブ保育)については、保育者が実践している、発達障害のある幼児に対する合理的配慮の実態を明らかにした研究や(勝浦・荻原・上田, 2018)²⁾、保育現場の実態として、インクルーシブ保育に関する困難や課題と、それに対して園長がどのように取り組んでいるのか明らかにした研究(市川・仲本, 2021)³⁾、幼稚園において「気になる子」と診断済みの「障害児」への支援の実施状況や必要性についての違いの比較を行った研究(原口・野呂・神山, 2015)⁴⁾などが散見される。このように、インクルーシブ保育の現場における、子どもに対する

支援の検討，園内体制の検討，保育者の実践などについてはこれまでも検討されている。しかし，インクルーシブ保育の場で実施されている支援について，適応支援や発達支援の視点から整理，検討された研究は未だ見られない。

このようなインクルーシブ保育を支える取り組みとして，巡回相談がある。巡回相談とは専門機関のスタッフが保育園・幼稚園を訪問し，子どもの園での生活を実際に見たうえでそれに即して専門的な援助を行うこと（浜谷他，1990）²⁾であり，子どもの発達を保障し，子どもが遊び・生活・学習へ参加することを支援することが目的である。地域における診断済みの子どもだけでなく，保育所/幼稚園/子ども園などの施設で「気になる子」についても相談することができたり，保護者支援に繋がったりすることができる，という特長がある。

巡回相談について，相談員をコンサルタント，保育者をコンサルティ，障害児をクライアントと捉え，保育者が障害児を保育することを相談員が支援するという，コンサルテーションとして捉える意見もある。浜谷（2005）³⁾はこのような支援の形を発達臨床コンサルテーションとし，その4つの特徴を明らかにした。その特徴とは，①保育者を介した子どもへの間接支援，②相談員と保育者の共同関係を重視する，③発達に関するアセスメントを重視する，④保育者が実行可能な助言を行うこと，であるとされ，このことから相談員は発達臨床に関する知識や能力と共に，保育現場についての理解が欠かせず，高い専門性が求められることが分かる。また，金谷（2018）⁴⁾は相談員に必要な要素として，保育者を支援する相談員も子どもを保育の場でどのように育てるのかといった保育観をもっていなければ支援できないことを指摘している。加えて，保育をするのは保育者であるため，その保育者の保育観に寄り添いながら，子どもの利益を第一に考えつつ，保育を共に考えていくことが求められるとしている。

このように，相談員は子どもの支援のみならず，保育者や保護者の思い，願いをくみ取りながら支援者として関わっていくことが求められる。このプロセスには，保育者と相談員の考えの違いや，相談員自身の思い，保護者から保育者への要望などをはじめとし，様々な要因が複雑に絡み合うため，様々なパターンが存在すると考えられる。そのため，相談員や現場の熟達求められることが考えられる。しかし，場当たりの対応の検討のみではなく，実践につ

いてさらに広い視点から整理することが求められるのではないだろうか。

以上のことから，インクルーシブ保育・教育の場においては，合理的配慮を含む適応支援と，子どもの発達上の課題達成を支援する発達支援が求められるといえる。このような場を支え，共に取り組む支援者として巡回相談員が挙げられる。この巡回相談員は，子どもの支援のみでなく，保育者や保護者の思いを汲みながら臨機応変に対応していくことが求められる。しかし，今後の更なる支援の発展に向け，臨機応変な対応の検討のみでなく，その実践について整理していくことが求められるだろう。特に，巡回相談員が発達支援と適応支援をどのように意識して支援に携わっているのか整理していく必要があると考えられる。

そこで，本研究では，幼児期におけるインクルーシブ保育・教育の現状と問題点を整理し，インクルーシブ保育と障害幼児の療育における配慮と支援について検討することを目的とする。そのために，主に巡回相談に携わっていると考えられる心理職を対象に，インクルーシブ保育・教育における支援者としてのスタンスについて調査を実施した。

II. 方法

1. 対象者

臨床心理士または公認心理師の資格をもつ者（以下，心理職）に調査への協力を依頼した。また，研究倫理を遵守し，協力者には研究趣旨を説明し，了解を得たうえで調査への参加を依頼した（東京学芸大学研究倫理委員会〔承認番号454〕）。回答のあった20～70代の109名を分析対象とした。

2. 調査期間・方法

調査は2022年4～7月に実施した。調査はオンラインによるWeb調査によって実施した。

3. 調査内容

インクルーシブ保育・教育における心理職の支援の現状や，支援に関わる際のスタンスを把握するための質問項目を作成した。以下の質問内容について，当てはまる/やや当てはまる/どちらでもない/やや当てはまらない/当てはまらないの5件法の選択式による回答を求めた。

(1) フェイスシート

対象者の属性(性別・年齢)について選択式で回答を求めた。また、現在と過去を通した巡回相談の経験の有無、巡回相談の経験がある場合は巡回相談を行った経緯と相談の主な役割について選択式(複数回答可)で回答を求めた。

(2) インクルーシブ保育・教育に関わる支援について

インクルーシブ保育・教育に関わる支援について、①インクルーシブ保育・教育の場における支援についての考えや意見についての質問、②心理士として助言を求められた際についての質問、③心理士としての障害のある子どもへの支援のスタンスについての質問、について回答を求めた(Table 1)。なお、巡回相談の経験がない方には、自身がそのような機会を得た際にどのような考えを持つか回答を求めた。

● Ⅲ. 結果

1. フェイスシート

回答者 109 名の属性は、男性 30 名(27.5%)、女性 74 名(67.9%)、無回答 5 名(4.6%)、20 代 22 名(20.2%)、30 代 48 名(44.0%)、40 代 15 名(13.8%)、50 代 6 名(5.5%)、60 代以上 13 名(11.9%)、無回答 5 名(4.6%)であった。また、巡回相談の経験については、現在行っている者 19 名(17.4%)、過去に行っていた者 20 名(18.3%)、巡回相談の経験はない者 70 名(64.2%)であった。巡回相談を現在または過去に行った者にその経緯を尋ねた結果、50 件の回答が得られ、専門機関からの派遣 15 件(30.0%)、行政からの委託 22 件(44.0%)、幼稚園/保育所からの個人依頼 11 件(22.0%)、その他 2 件(4.0%)であった。その他の内訳としては、学校からの依頼、会計年度職員としての派遣であった。また、巡回相談の主な役割については 68 件の回答が得られ、子どもについてのアセスメント 27 件(39.7%)、保育に関する助言 31 件(45.6%)、保護者支援 8 件(11.8%)、その他 2 件(2.9%)であった。その他の内訳としては、教育に関する助言であった。

2. インクルーシブ保育・教育に関わる支援について

2. 1. 回答の内訳

質問の項目と回答の一覧を Table 1 に示す。

「インクルーシブ保育・教育の場では、発達支援が優先されるべきである」という質問に対し、

「当てはまらない」5 名(4.6%)、「やや当てはまらない」10 名(9.2%)、「どちらでもない」29 名(26.6%)、「やや当てはまる」48 名(44.0%)、「当てはまる」17 名(15.6%)であった。一方、「インクルーシブ保育・教育の場では、適応支援が優先されるべきである」という質問に対し、「当てはまらない」2 名(1.8%)、「やや当てはまらない」23 名(21.1%)、「どちらでもない」30 名(27.5%)、「やや当てはまる」40 名(36.7%)、「当てはまる」14 名(12.8%)であった。インクルーシブ保育・教育の場において、発達支援と適応支援のどちらについても、「優先されるべき」という傾向の「やや当てはまる」と「当てはまる」の回答をした人が約半数を占めた。

「自身の支援に対する考えを、保育園/幼稚園に理解してもらえないことが多いと感じる」という質問に対しては、「当てはまらない」10 名(9.2%)、「やや当てはまらない」25 名(22.9%)、「どちらでもない」50 名(45.9%)、「やや当てはまる」17 名(15.6%)、「当てはまる」7 名(6.4%)であり、「どちらでもない」が最も多く、「当てはまらない」「当てはまる」に向かって緩やかに回答が少なくなる結果となった。

「子どもにとって望ましい支援をしてもらいたいと思っても、現在の現場の状況では実現困難であると感じる」という質問に対しては、「当てはまらない」0 名、「やや当てはまらない」8 名(7.3%)、「どちらでもない」24 名(22.0%)、「やや当てはまる」47 名(43.1%)、「当てはまる」30 名(27.5%)と、「当てはまる」に向かうにつれて回答が多くなる結果となった。

「巡回相談を行う心理士は、保育に関する知識や実践を養成段階から学ぶことができると良い」という質問に対しては、「当てはまらない」0 名、「やや当てはまらない」6 名(5.5%)、「どちらでもない」9 名(8.3%)、「やや当てはまる」53 名(48.6%)、「当てはまる」41 名(37.6%)であり、「やや当てはまる」「当てはまる」側に大きくシフトする結果となった。

「支援に関する思いや考え方が心理士と保育園/幼稚園で対立した際には、心理士としての思いや考え方を優先する」という質問に対しては、「当てはまらない」16 名(14.7%)、「やや当てはまらない」50 名(45.9%)、「どちらでもない」36 名(33.0%)、「やや当てはまる」5 名(4.6%)、「当てはまる」2 名(1.8%)と、「当てはまらない」「やや当てはまらない」側にシフトした結果であった。一方、「支援に関する思いや考え方が心理士と保育園/幼稚園で対立した際には、保育園/幼

Table 1 インクルーシブ保育・教育に関わる支援についての質問項目

質問項目	当てはまらない	やや当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	当てはまる
インクルーシブ保育・教育の場における支援に関する考えや意見についての質問					
1. インクルーシブ保育・教育の場では、発達支援が優先されるべきである。	5 (4.6%)	10 (9.2%)	29 (26.6%)	48 (44.0%)	17 (15.6%)
2. インクルーシブ保育・教育の場では、適応支援が優先されるべきである。	2 (1.8%)	23 (21.1%)	30 (27.5%)	40 (36.7%)	14 (12.8%)
3. 保育園/幼稚園でも療育的な役割を積極的に担うことが望ましいと考える。	1 (0.9%)	22 (20.2%)	23 (21.1%)	52 (47.7%)	11 (10.1%)
4. 保育園/幼稚園では療育的な役割は担わず、保育に専念することが望ましいと考える。	14 (12.8%)	55 (50.5%)	20 (18.3%)	15 (13.8%)	5 (4.6%)
5. 保育園/幼稚園でも療育的な役割を担い、専門機関と協働していくことが望ましいと考える。	0	8 (7.3%)	12 (11.0%)	57 (52.3%)	32 (29.4%)
心理士として助言を求められた際についての質問					
6. 自身の支援に対する考えを、保育園/幼稚園に理解してもらえないことが多いと感じる。	10 (9.2%)	25 (22.9%)	50 (45.9%)	17 (15.6%)	7 (6.4%)
7. 保育園/幼稚園の専門性を活かすことができるよう提言することを意識する。	2 (1.8%)	6 (5.5%)	14 (12.8%)	58 (53.2%)	29 (26.6%)
8. 子どもの発達支援に特化した助言によって、保育園/幼稚園の保育の良さや強みが失われてしまうように感じる。	13 (11.9%)	48 (44.0%)	32 (29.4%)	16 (14.7%)	0
9. 子どもにとって望ましい支援をしてもらいたいと思っても、現在の現場の状況では実現困難であると感じる。	0	8 (7.3%)	32 (29.4%)	16 (14.7%)	0
心理士としての障害のある子どもへの支援のスタンスについての質問					
10. 巡回相談を行う心理士は、保育に関する知識や実践を養成段階から学ぶことができると良い。	0	6 (5.5%)	9 (8.3%)	53 (48.6%)	41 (37.6%)
11. 巡回相談を行う心理士は、発達心理学や臨床心理学に関する知識を専門とし、保育に関する知識に傾倒しすぎない方が良い。	13 (11.9%)	44 (40.4%)	24 (22.0%)	20 (20.2%)	6 (5.5%)
12. 支援に関する思いや考え方が心理士と保育園/幼稚園で対立した際には、心理士としての思いや考え方を優先する。	16 (14.7%)	50 (45.9%)	36 (33.0%)	5 (4.6%)	2 (1.8%)
13. 支援に関する思いや考え方が心理士と保育園/幼稚園で対立した際には、保育園/幼稚園の思いや考え方を優先する。	7 (6.4%)	13 (11.9%)	44 (40.4%)	41 (37.6%)	4 (3.7%)
14. 巡回相談を行う心理士としては、障害のある子どもの個別スキルの獲得が第一に重要である。	13 (11.9%)	44 (40.4%)	34 (31.2%)	17 (15.6%)	1 (0.9%)
15. 巡回相談を行う心理士としては、障害のある子どもの集団生活の参加スキルの獲得が第一に重要である。	7 (6.4%)	30 (27.5%)	39 (35.8%)	29 (26.6%)	4 (3.7%)
16. インクルーシブ保育・教育の場における支援において、保育士/幼稚園教諭のエンパワメントやコンサルテーションを行うことが第一に重要である。	0	9 (8.3%)	15 (13.8%)	61 (56.0%)	24 (22.0%)

稚園の思いや考え方を優先する」という質問に対しては、「当てはまらない」7名(6.4%),「やや当てはまらない」13名(11.9%),「どちらでもない」44名(40.4%),「やや当てはまる」41名(37.6%),「当てはまる」4名(3.7%)と、やや「当てはまる」側にシフトした結果であった。

「インクルーシブ保育・教育の場における支援において、保育士/幼稚園教諭のエンパワメントやコンサルテーションを行うことが第一に重要である」という質問に対しては、「当てはまらない」0名、「やや当てはまらない」9名(8.3%),「どちらでもない」15名(13.8%),「やや当てはまる」61名(56.0%),「当てはまる」24名(22.0%)であり、「やや当てはまる」「当てはまる」の側に大きくシフトする結果となった。

2. 2. インクルーシブ保育・教育の場における支援に関する考えや意見について

インクルーシブ保育・教育の場における支援に関する考えや意見について尋ねた結果から、HADを用いて ward 法によるクラスタ分析を行った。その結果が Fig.1 である。

クラスタ1は、他の群と比べ、インクルーシブ保育・教育の場において発達支援、適応支援ともに優先されるべきとする志向性が高く、加えて幼稚園/保育所でも療育的な役割を担うことが望ましく、専門機関と協働していくことが望ましいとする志向性が高かった。このように、幼稚園/保育所では発達支援、適応支援、療育的な役割の全てが望ましいと感じている群であった。そのため、クラスタ1は「全般的重視群」と命名した。全般的重視群は53名であった。

クラスタ2は、他の群と比べ、幼稚園/保育所でも療育的な役割を担うことが望ましく、専門機関との協働が望ましいとする志向性が高かった。そのため、クラスタ2は「療育的役割重視群」と命名した。療育的役割重視群は19名であった。

クラスタ3は、幼稚園/保育所では療育的な役割は担わず保育に専念することが望ましいとする志向性が高く、その他の項目の点数は低かった。そのため、クラスタ3は「保育専念重視群」と命名した。保育専念重視群は37名であった。

2. 3. 心理職として助言を求められた際について

心理職として助言を求められた際について尋ねた結果から、ward 法によるクラスタ分析を行った。その結果が Fig.2 である。

クラスタ1は、他の群と比べ、自身の支援に対する考えを幼稚園/保育所に理解してもらえない、子どもの発達支援に特化した助言によっ

て幼稚園/保育所の良さや強みが失われてしまう、子どもにとって望ましい支援をしてもらいたいと思っても現状では実現困難である、と感じている群であった。そのため、クラスタ1は「現状憂慮群」と命名した。現状憂慮群は51名であった。

クラスタ2は、他の群と比べ、幼稚園/保育所の専門性を活かすことができるよう提言する志向性が低く、子どもにとって望ましい支援が現状で実現困難とは感じていない群であった。そのため、クラスタ2は「現状諦観群」と命名した。現状諦観群は22名であった。

クラスタ3は、幼稚園/保育所の専門性を活かした提言をしようとする志向性が他の群に比べて高く、自身の支援に対する考えを理解してもらえないことや、発達支援に特化した助言によって幼稚園/保育所の良さが失われてしまうことは感じていない群であった。他の群と比べ、比較的現状に満足している群であると考えられることから、クラスタ3は「現状満足群」と命名した。現状満足群は36名であった。

2. 4. 心理職としての障害のある子どもへの支援のスタンスについて

心理職としての障害のある子どもへの支援のスタンスについて尋ねた結果から、ward 法によるクラスタ分析を行った。その結果が Fig.3 である。

クラスタ1は、巡回相談を行う者は発達心理学や臨床心理学に関する知識を専門とし、保育に関する知識に傾倒しすぎない方が良いとする志向性が高かった。また、他の群と比べ、障害のある子どもの集団生活参加スキルの獲得が重要であるとする志向性が高かった。これらのことから、クラスタ1は「心理専門性重視群」と命名した。専門性重視群は32名であった。

クラスタ2は、他の群と比べ、支援に関する思いや考えが巡回相談担当者として幼稚園/保育所と対立した際には、巡回相談を行う者としての自身の思いや考えを優先する志向性が高かった。また、他の群と比べ、障害のある子どもの個別スキルの獲得が重要であるとする志向性が高かった。加えて、巡回相談を行う者は保育に関する知識や実践を養成段階から学ぶことができるという志向性が高かった。これらのことから、クラスタ2は「個別スキル獲得重視群」と命名した。個別スキル獲得重視群は38名であった。

クラスタ3は、支援に関する思いや考えが巡回相談担当者として幼稚園/保育所と対立した際

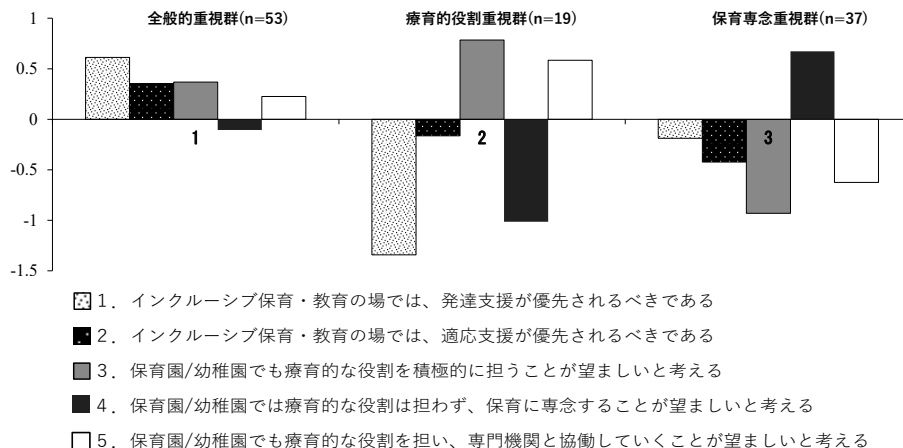


Fig.1 インクルーシブ保育・教育の場における支援に関する考えや意見について

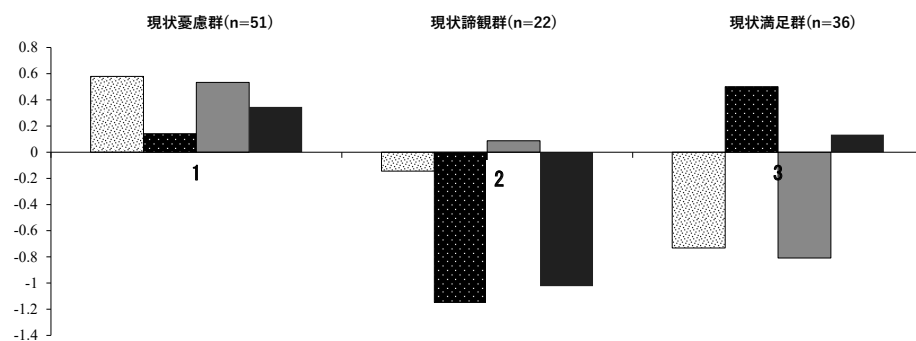


Fig.2 心理職として助言を求められた際について

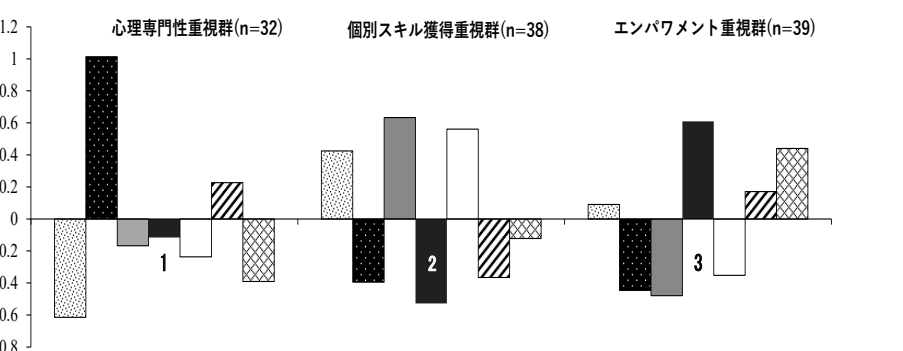


Fig.3 心理職としての障害のある子どもへの支援のスタンスについて

には、幼稚園/保育所の思いや考えを優先する志向性が高かった。また、他の群と比べ、インクルーシブ保育・教育の場における支援では、保育者のエンパワメントやコンサルテーションが重要であるとする志向性が高かった。これらのことから、クラスタ3は「エンパワメント重視群」と命名した。エンパワメント重視群は39名であった。

● IV. 考察

本調査では、インクルーシブ保育・教育の場における支援について、心理職の支援の場に関する意見や考え、支援に携わるうえで意識すること、障害のある子どもへの支援のスタンスについて調査を行った。

インクルーシブ保育・教育の支援の場における心理職の意見や考えとしては、幼稚園/保育所では発達支援と適応支援のどちらも重要であり、加えて専門機関と協働しながら療育的な役割を担うことが望ましいとする全般的重視群の人数が多く、割合としては回答者の約半数の人数を占めた。また、発達支援と適応支援のどちらか一方のみを優先すべき、とする傾向は見られなかった。一方で、幼稚園/保育所でも療育的な役割を担うことが望ましいとする療育的役割重視群と、保育に専念することが望ましいとする保育専念重視群の2群に分かれていた。

支援に携わるうえで意識することについては、発達の視点に特化した助言によって幼稚園/保育所の良さが失われてしまう、自身の考えを理解してもらえない、望ましいと思う支援があっても現状では実現が難しい、という思いを抱え、支援の現状を憂慮していると思われる現状憂慮群の人数は回答者の約半数を占めており、現状の支援の体制の課題が示唆された。また、望ましい支援が現状で実現困難と感じていないものの、幼稚園/保育所の専門性を活かした提言をしようとする志向性が低い現状諦観群も存在した。一方で、幼稚園/保育所の専門性を活かすよう意識して提言しながら、発達の視点からの助言を行っても幼稚園/保育所の良さが失われると感じることは少なく、自身の考えも理解されていると感じており、現状では幼稚園/保育所と良い関係性を築くことができていると考えられる現状満足群も見られた。このように、現状うまくいっていると感じている群と、そうではない群に大きく分かれた。このような群に

分かれた背景要因として、幼稚園/保育所の風土や心理職としての経験の蓄積、モチベーションの違いなどが考えられる。

心理職としての障害のある子どもへの支援のスタンスについては、心理職としての専門性を重視する群、相談担当者としての自身の思いを優先し、障害のある子どもの個別スキル獲得を重視する群、幼稚園/保育所の意見を尊重し、エンパワメントを重視する群の3群に分かれた。これらの各群の人数には大きな偏りはなく、3つの群にほぼ同数ずつが分かれた。

これらのことから、インクルーシブ保育・教育の場では発達支援と適応支援のどちらも重要である、というスタンスの心理職が多いが、そのような自身の考えを幼稚園/保育所に理解してもらえないと感じ、望ましいと思う支援は実現困難であると感じている者も存在し、理想と現状の乖離が示された。また、巡回相談に関して、心理職全体としては偏ることなく様々なスタンスで支援に携わっており、様々なスタンスが存在するという事実を、心理職自身が理解していることが示唆された。心理職はこのような様々なスタンスを、子どもの様子、保護者の思い、幼稚園/保育所の状況や思いなど、様々な要因を考慮して、状況に応じて使い分けられていることが考えられる。つまり、インクルーシブ保育・教育の場では発達支援と適応支援のどちらも重要である、という「軸となるスタンス」に加え、ケースに応じた支援を組み立てていくための「流動的なスタンス」があるといえるだろう。そして、心理職はこの2つのスタンスの折り合いをつけながら支援を行っていることが考えられる。このような状況に応じたスタンスの使い分けのプロセスを解明することは、今後の支援を検討していくうえで有効であると考えられる。本研究で行った選択式の調査では、このようなプロセスの細部までは捉えることはできないため、今後現場の観察やインタビュー調査、仮想事例などを用いて、心理職がどのような要因を判断材料としているのかについて、さらに検討していくことが求められるだろう。

文 献

- 1) 文部科学省(2012): 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告). 中央教育審議会初等中等教育分科会. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm(2022.8.10 取得)

- 2) 浜谷直人・秦野悦子・松山由紀・村田町子(1990) : 障害児保育における専門機関との連携 3 川崎市における障害児保育巡回相談のとりくみの視点と特徴. 障害者問題研究, 6, 42-52.
- 3) 浜谷直人(2005) : 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか: 発達臨床コンサルテーションの支援モデル. 発達心理学研究, 16(3), 300-310.
- 4) 原口英之・野呂文行・神山努(2015) : 幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題－障害の診断の有無による支援の比較－. 障害科学研究, 39, 27-35.
- 5) 市川奈緒子・仲本美央(2021) : 園長はいかに持続可能なインクルーシブ保育を創出しているのか－保育を支える陰の努力の解明－. 質的心理学研究, 20, 219-226.
- 6) 金谷京子(2018) : 発達と保育を支える巡回相談－臨床発達支援とアセスメントのガイドライン－. 金子書房.
- 7) 勝浦真仁・荻原はるみ・上田敏丈(2018) : 幼児への配慮－SCAT を用いた保育者の語りの分析から－. 国際幼児教育研究, 25, 61-74.

(受稿 2022.10.14, 受理 2023.05.01)